

令和 5 年度

日立市教育研究会

生活科・総合的な学習の時間研究部実践事例集



日立市教育研究会 生活科・総合的な学習の時間研究部

実践事例集の発行にあたって

情報化やグローバル化の進展，人工知能（A I）の飛躍的な進化，絶え間ない技術革新等により，将来予測困難な時代を生きる子どもたちは，多様な人々と協働しながらさまざまな社会の変化を乗り越え，持続可能な社会の創り手となることが求められています。そのためには「具体的な活動や体験を通して，身近な生活に関わる見方・考え方を生かし，自立し生活を豊かにしていく」「探究的な見方・考え方を働かせ，横断的・総合的な学習を行うことを通して，よりよく課題を解決し，自己の生き方を考えていく」といった生活科・総合的な学習の時間で育む資質・能力がとても重要です。

また，今回の改訂で示された「主体的・対話的で深い学び」は，子ども主体の能動的な学習活動をより一層充実することであり，令和3年度の答申で示された「個別最適な学びと協働的な学び」では，一人一人に応じた学習活動を充実するとともに，ともに学ぶことでより個人の学びの質を高め，同時に集団の質も高めていく学習活動を展開することが求められています。これは，今まで生活科や総合的な学習の時間で重視してきた学習活動が，他教科に広がったと言えます。

今年度は，「第25回関東地区小学校生活科・総合的な学習の教育研究協議会 群馬大会」に市内の生活・総合的な学習の時間教育研究部員を中心にオンラインの参加をしました。研修では，『①新しい時代に求められる資質・能力を生活・総合の時間を通してどのように育成するか明確にすること ②「整理・分析」「まとめ・表現」を意識した探究のプロセスを改善し，資質・能力の向上を図っていくこと ③学校全体で育てたい資質・能力と発達段階や各教科等との相互の関わりを意識した全体計画の作成すること』などについて学ぶ機会となりました。このような取組を是非，自校化していければと思います。生活科や総合的な学習の時間は，専門の教科としての免許状がないこともあり，毎年各学校で部員がかわることも珍しくありません。若い先生方も多く，改めて研修の機会を確保することの必要性を痛感いたしました。

今年度は，コロナ禍後，人と人との交流や本物に触れる体験を大切にしてきた生活科や総合的な学習の時間においては，あらたな工夫をもって，教育活動を進める先生方の努力やご苦勞があったと思います。先生方で情報交換をしながら，よりよい授業づくりに努めていきましょう。

最後になりましたが，「令和5年度 生活科・総合的な学習の時間研究部実践事例集」が，地区の先生方のご協力のもと発行できますことに，深く感謝申し上げます。この実践事例集が，各校のさらなる充実した授業づくりにご活用いただければ幸いです。

令和6年2月

日立市教育研究会生活科・総合的な学習の時間研究部
部長 木村 央

日立市教育研究会

生活科・総合的な学習の時間研究部実践事例集 目次

【小学校】

1	日立市立助川小学校	1
2	日立市立会瀬小学校	3
3	日立市立宮田小学校	5
4	日立市立仲町小学校	7
5	日立市立中小路小学校	9
6	日立市立大久保小学校	11
7	日立市立成沢小学校	13
8	日立市立諏訪小学校	15
9	日立市立塙山小学校	17
10	日立市立油縄子小学校	19

【中学校】

1	日立市立助川中学校	21
2	日立市立平沢中学校	23
3	日立市立駒王中学校	25
4	日立市立多賀中学校	27
5	日立市立大久保中学校	29
6	日立市立日立特別支援学校中学部	31

探究的な見方・考え方を働かせた横断的・総合的な学習過程の充実
～一人一人の「やりたい」に応じるフリースタイルプロジェクトを通して～

日立市立助川小学校

1 はじめに

本校では、6年生の総合的な学習の時間において「自分を見つめて、未来を見すえて」というテーマで自分の良さや特徴を再発見したり、そこから将来の夢や職業選択へと学習を広げたりして、キャリア教育の充実を図っている。その一環として、児童一人一人が自分の興味・関心のあることや得意・不得意などから、研究を進めたいテーマを設定し、学習計画を立てる「フリースタイルプロジェクト」という活動を行った。テーマによって研究の進め方は異なるが、どの研究を進めるにあたって、他教科との関連やこれまで学習してきた様々な力を活用していくこととなる。学習を通して、児童が探究プロセスを身に付けていってほしいという思いもこめて、本実践を行った。

2 資料

(1) 主な評価規準と単元計画

① 主な評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
将来の夢や職業選択を考える中で、自己の興味関心が広がるのが、探究的に学習したことの成果であると気付いている。	自分の興味・関心のあることや得意・不得意などから、研究を進めたいテーマを設定し、学習計画を立てている。	課題解決に向け、自分のよさや得意・不得意に気づき、探究活動に進んで取り組もうとしている。

② 単元計画

時	ねらい・学習活動（10時間扱い）	評価規準		
		知	思	態
1	学習の進め方を確認する。自分の興味・関心に応じたテーマを設定し、学習計画を立てる。		○	
2 ～ 5	学習計画に沿って、研究を進める。 毎時間、学習のふり返りと計画の見直しを行う。			○
6	中間報告会を行う。		○	
7 8	中間報告会をふまえて、自分の研究を見直し、発表に向けて研究を進めたり、まとめたりする活動を行う。		○	
8	発表の準備を行う。	○		
9	それぞれの研究の成果を発表する。		○	
10	自分の研究をふり返って、単元のまとめを行う。	○		

(2) 学習で活用したワークシート

各自が学習計画を具体的に設定することで、探究の見通しをもって活動できるようになった。

【学習計画及び振り返り】			
時間	計画（具体的に）	修正後の計画	振り返り
①	ガイダンス テーマ設定 学習計画の作成		
②	必要な情報をノートにまとめる 調べる。あつめる。		今日は、自分が調べることができたところまで調べた。次も調べたいところもそろそろ調べてみたい。
③	必要な情報をノートにしぼる 構図を考へる。	必要な情報をノートに よめる。	今日で調べていることがあつた。たぶん、仮定でいい。
④	それに合った 画像を調べる。	情報としぼる ノートに。	

計画の修正ができる枠を設けることで、自分の活動を振り返りながら、必要に応じて活動を変えていけるようにした。それにより、新たな課題が見つかったり、さらに情報収集が必要だったり探究のプロセスが繰り返されていた。

(3) 場の設定について

児童の「やりたい」に応じた活動となるため、活動場所についても児童の研究の内容に応じたものとなる。特別支援の先生方にもサポートをいただき、それぞれの場所で安心して活動が行えるようにした。



自分の得意なことを伸ばすため、サッカーのシュート練習を行っている



三言語で曲紹介をした後、ピアノで発表を行う練習をしている



自分の興味・関心を広げるため、Scratchでゲームを作成している

(4) 発表の様子について

研究したものを発表する活動では、児童一人一人が、自分の研究内容に合った方法（スライドにまとめる・実演する・動画で紹介する等）で発表を行った。また、Padletを活用し、発表した人への評価をリアルタイムで行えるようにした。



3 成果と課題

- (1) 児童一人一人が自分の「やりたい」に応じた研究を進めることで、意欲的に活動を行うことができた。また、ふり返りの時間を毎時間しっかり確保することで、自己の学習計画を見直し、修正し課題を再設定するという探究プロセスを各自行うことができていた。
- (2) それぞれの研究テーマごとに、活用した各教科の見方・考え方が異なるため、一人一人の活動を教師が適切に把握し、価値付けることが難しい。今後、児童が行っている教科横断・総合的な活動を価値付け、他教科でも生かすことができるように、指導計画を工夫していきたい。

1 はじめに

本校では、「主体的に自分の考えや思いを発信する児童の育成」を研究し、教育活動の充実や展開に努めている。本単元は、児童が、地域の施設や人々と直接関わる活動や体験をする中で、身近な生活を自分との関わりで捉え、自分自身や自分の生活について考える。そして、活動や体験を通して、対象から様々な情報を取り出し、表現したいという意欲が生まれるようにすることが大切である。

そこで、1学期の「まちたんけん」では、自分たちの住む会瀬地域には、どのような施設や店、人々がいるのかを探っていく。そして、見つけたことや疑問に思ったことを、友達と伝え合う中で、新たなことに気づき、もう1度行ってみたい、観察してみたいという気持ちをもたせ、2回目の探検につなげる。2学期の探検では、1学期に発見したことをもとに、グループで課題を設定し、調べ学習を進める。調べて分かったことを、新聞やＩＴＣを活用してのプレゼンテーションにより表現することで、思考や表現が一体的に繰り返し行われ、自立し生活を豊かにしていくための資質・能力が育成できると考えている。

2 資料

(1) 指導案

目 標

- ・探検で見つけたことや気付いたことを、グループ相互に交流する活動を通して、自分の生活との関わりの広がり考えることができる。

準備・資料

- ・絵地図（グループ分）・ワークシート・付箋・まとめカード・タブレット・シール

展 開

学習活動・内容	・手立てや留意点、◎個に応じた支援 ○考えや思いを発信するための手立て
1 本時のめあてを知る。 まちたんけんをして、見つけたことや、気づいたことを つたえ合おう。	・前時は、探検後のまとめを各自で行ったが、本時は、それをもとにして、グループで交流を行うことを伝え、座席をグループ活動の隊形にするよう指示する。 ・前時に書いた、「見つけたこと、気付いたこと」「分からなかったこと、気になったこと」のワークシートと、写真（タブレット）を準備することで、前時からの繋がりを意識しやすくする。
3 友達に特に伝えたいことを付箋に書く。	○前時にワークシートに書いた「見つけたこと、気付いたこと」の中から、特に伝えたいことを付箋に書く。 ・「見つけたこと、気付いたこと」はピンク色の付箋に、「分からなかったこと、気になったこと」は黄緑の付箋に書くように説明する。 ・伝えたいことがいくつかあるときは、数枚書いてもよいことを伝える。 ◎書くことが決まらない児童には、撮った写真を一緒に見ながら、課題に対する助言をする。
4 グループで順番に、書いた付箋を読み上げながら絵地図に貼る。	・なぜ「特に伝えたい」のか、理由を添えて発表できるように指示する。 ・グループで1枚の絵地図に付箋を貼っていくことで、友達がどん

5 グループの考えを整理し、まとめる。

6 本時のまとめをする。

ちいきには、じぶんたちの生活とかかわっている場所や、じぶんたちの生活をたのしくしてくれている場所がたくさんある。

7 振り返りをする。

みんなと地域の発見を伝え合い、自分が住んでいる地域には、たくさんの施設や店があることが分かった。お店や、施設の人がどんな仕事をしているのか、もっと知りたくなった。

なとこに気付いたのかが見て分かるようにする。
○交流の際に、友達の付箋にリアクションシールを貼り、「ぼくもそう思った」「同じだ」「たしかに」「ほんとうだ」など、友達の意見と自分の意見を比べながら聞くように声をかける。

○交流しながら、グループの考えを整理し、「気付いたこと、分かったこと」と「気になったこと、分からなかったこと」に分けて、まとめカードに書く。

（評）身近な地域には自分たちの生活と関わり、生活を楽しみしてくれる場所があることを実感し、それらを自分の生活に取り入れようとしている。（発言・カード）

【目標を達成した児童の姿】

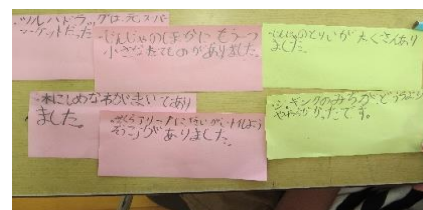
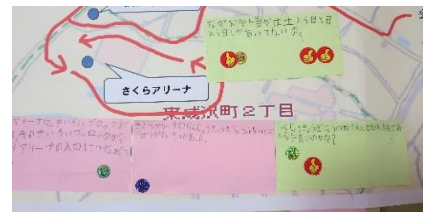
まとめカードへの記述

- ・自分が住んでいる地域には、たくさんの物や場所があることが分かった。
- ・神社の神主さんは、普段はどんな仕事をしているの気になった。

- ・全グループの絵地図を黒板に掲示し、クラス全体でまだ分かっていないことがあり、そのためにまた活動すべきことに気付けるようにする。
- ・次時では、グループでまとめたカードを使い、クラス全体で交流を行うことを伝える。

- ・全グループの絵地図を黒板に掲示し、クラス全体でまだ分かっていないことがあり、そのためにまた活動すべきことに気付けるようにする。
- ・次時では、グループでまとめたカードを使い、クラス全体で交流を行うことを伝える。

(2) 活動の様子・ワークシート



3 成果と課題

- ・文字や文を書くことが苦手で、探検中に発見したことを細かくメモできなかった児童でも、タブレットで写真を撮ることによって、本時の「伝えたいことを付箋に書く」という工程を、スムーズに進めることができた。
- ・交流の中に、リアクションシールを取り入れたことで、自分の意見を伝えながら友だちの意見も聞いて活動できた。
- ・完成した全グループの地図を掲示したことで、自分が住んでいる地域には、たくさんの物や場所があることに気づくことができた。

（課題）

- ・探検を行った当初は、探検を行う意義が児童に明確に伝わらず、探検の中で見つけた動植物にばかりに興味に向いてしまった。町探検を行う目的や、地域の施設や店、そこで働く人々に焦点をあてるという視点を、児童にきちんと認知させることが大切だと感じた。

「問題解決や探究活動に主体的に取り組む、よりよく問題を解決する資質を高める実践」

日立市立宮田小学校

1 はじめに

本校は、「よく遊び、よく学び、助け合いのできる」児童の育成を目指している。それを受けて、総合的な学習の時間では、「学び方やものの考え方を身に付け、問題の解決や探究活動に主体的、創造的、協同的に取り組む態度を育て、自己の生き方を考える」ことを目標としている。

本校の児童は、明るく活発で、物おじせずに意見の発表や自己表現ができる児童が多い。しかし、何事にも意欲的に取り組む一方で、持続力、集中力、根気強さに課題のある児童も見られる。そこで、体験的な学びを重視し、問題解決や探究活動に主体的に取り組む、よりよく問題を解決する資質を高める実践を行った。

2 資料 第4学年：人にやさしい宮田を考えよう

(1) 単元のねらい

高齢者や障害者に関わる調べ学習や体験活動を通して、地域における高齢者や障害者の現状と問題を理解するとともに、相手の立場に立って、自分ができることを考え、互いの良さをいかしながら、積極的に社会に参画しようとする態度を養うことができる。

(2) 単元計画（35時間扱い 表現＝分析・表現、自＝自己理解、他＝他者理解、協＝協同）

第1次 福祉について知ろう。・・・・・・・・・・・・・・・・（2時間）

第2次 福祉について調べ、体験学習をしよう。・・・・・・・・（23時間）

小単元名（時数）	○主な学習活動	○支援 <u>評価基準</u> 【評価方法】
福祉とは何かについて調べよう。 （3時間）	○「福祉」について調べる。 ○福祉の仕事について調べる。 ○どのような人が支援を必要としているのか調べる。	○調べたことを発表する場面を設け、全体で共有する。 <u>表現①</u> 福祉について調べたことをまとめ、発表することができる。 【発言・発表スライド】
どんな支援が必要か調べよう。（8時間）	○個人やグループで課題解決に向けて調べる。 ○調べたことを全体に発表する。	○必要な情報が得られるように、様々な方法を提示する。 ○考えやすいように、生活する上でその人が何に困っているのかという視点で考えさせる。 ○調べたことを全体で共有する。 <u>協①</u> 協力して、発表資料をまとめている。 【発表スライド】
福祉体験をしよう。	○福祉体験をする。	○様々な体験ができるように場や

(12時間)	・点字、車椅子、アイマスク ○体験したことをまとめる。	時間を設定する。 ○体験したことをまとめ、振り返る機会を設ける。 自① 相手の立場に立って考え、自分ができるところを実践しようとしている。【発言・観察】 他① 思いやりをもって接している。【発言・観察】
--------	--------------------------------	--

第3次 福祉について調べたことや体験したことを新聞にまとめよう。(10時間)

(3) 授業の実際

① グループ発表

車椅子の人やお年寄りなど思いやりが必要な人はどんな手助けが必要かをグループごとに別れて調べ、全体で発表した。

相手によって手助けの種類が違ったり、様々な手助けの方法があることに気づき、学習した手助けを実践したいという気持ちが高まった。



② 福祉体験

点字体験では、点字を読むことの難しさを実感する体験となった。車いす体験では、初めて車いすに乗ったり、押したりする体験を通して、車いすでの生活の苦労や支える人の手助けの仕方を知ることができた。アイマスク体験では、視覚障がい者の感覚を体験し、視覚障がい者に優しく接していこうという気持ちが高まった。



3 成果と課題

(1) 成果

調べ学習を通して、福祉に対する興味・関心をもつことができた。さらに、点字体験や車いす体験、アイマスク体験を通して、支援が必要な人に対する興味・関心が高まり、「自分にできることは何か」について真剣に考え、意欲的に学習に取り組む児童の姿が多く見られた。

まとめの学習では、調べたことや体験したことだけでなく、考えたことや感じたことを新聞やプレゼンテーションにまとめ、表現することができていた。

(2) 課題

今年度は、新型コロナウイルスやインフルエンザの流行により、高齢者施設等に訪問したり、高齢者や支援を必要とする人と実際に交流したりすることができず、調べ学習が中心になってしまった。体験活動が児童の学習の深まりや意欲につながったことから、体験活動や交流が充実してできるような工夫が必要であると感じた。

1 はじめに

仲町小学校では、『「強く、正しく、美しく」保護者・地域とともに歩む仲町っ子の育成』という教育目標の下、学校・家庭・地域で児童を育てる信頼と活力のある学校づくりや、地域の人的・物的資源を生かし、児童が主体となって学ぶ授業づくり等に取り組んでいる。また、生活科では、「体験活動を効果的に取り入れ、意欲的に活動できる場の設定と知的な気づきを大切にする活動の工夫」「感じたことや体験したことを効果的に表現できる支援の方法の研究」という目標を立てて実践を行っている。

今回は、「じぶんでできるよ」の単元から家でのお仕事探検隊の事例について紹介する。児童の効果的な表現に向けて、発問の工夫とICT活用に力を入れ、実践を進めた。

2 実践事例

(1) 単元名 じぶんで できるよ

主な学習内容と気づき

①見通しを持つ。	自分にもできることは〇〇だ。
②家の仕事を調べよう。	家の仕事は口が口〇〇をしている。
③自分で OK ビンゴをやってみよう。	できることとできないことがわかった。
④ハッピーサンキューお手つだいビンゴをやってみよう。	家族のためにできることを探そう。
⑤名人ポイントをインタビューしよう。	仕事のコツは〇〇だ。
⑥お仕事調査隊で調べたことを伝え合おう。	1人1仕事みんなで伝え合い、学ぼう。
⑦活動を振り返ろう。	友だちの発表から〇〇がわかった。
⑧自分のできることを続けたり、新たな仕事に挑戦していこう。	これからも自分でできることを増やそう。できることを続けていこう。

(2) 本時の目標

友だちと伝え合う活動を通してお互いのよさに気付くことができる。自分が家庭の役に立っていることを実感しこれからも自分の役割を果たしていこうとすることができる。(態)

(3) 本時の展開

学習内容・活動	発問・ICT・評価
1 前時までの学習を振り返り、 本時のめあてを確認する。 〈かぞくニコニコ大さくせん その1〉 おしごとのコツ「名人ポイント」についてつたえあおう。	ICT① 事前に発表ノート(SKYMENU Cloud)を活用し、家 でのお仕事探検隊の写真を撮り掲示する。(家庭状況に配慮) 発問①家のお仕事探検隊として調べてみてどう思った？ 発問②仕事のコツ「名人ポイント」は何だったかな？ ICT②タブレット端末(写真やメモ)を見せ発表を行う。
2 調べたことを交流する。 【名人ポイント】 上手・時短・エコ・楽しい・毎日できる等	発問③友だちと伝え合ってみて、どう思ったかな？ ICT③ポジショニング(SKYMENU Cloud)を操作してから、 詳しく言葉で説明する発表を行う。

3 聞いて思ったこと・感じたことを交流する。

4 学習を振り返り、これからの生活への新たな願いをもつ。

かぞくニコニコ大さくせんその2は、これからもしごとをつづけていこう。あたらしいしごとにも、ぜひチャレンジしていこう。

ICT④ どのお仕事も家族のニコニコが増えましたね。

発問④ さらに、ニコニコを増やすためにはどうしたらいいかな？

(評) 伝え合い活動の観察・ワークシート
タブレット端末の写真を使いながら、「名人ポイント」を伝えている。友だちのよいところや自分なりの感想を話したり書いたりしている。(態)

これまでの活動を通して、仕事のコツや友だちのよいところを発見ができたことを称賛し、次時への実践につなぐ。

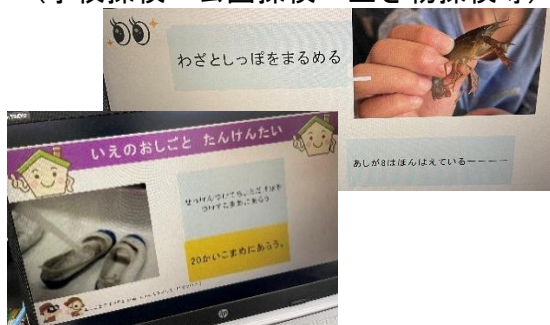
【カメラ機能や探検隊印の手作りカードを活用】

【一人一仕事の担当し、学び合う】

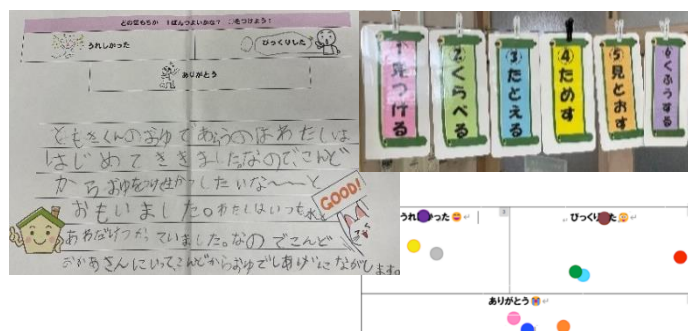


【発表ノート作成の積み重ね】

(学校探検・公園探検・生き物探検等)



【児童の思考の整理】



3 成果と課題

- ・事後アンケートでは、「理由付けて、友だちのよさを見つけれられた」という項目の数値が 65% から 86% に上がり、交流に深まりが感じられた。自分で撮影した写真を提示しながら発表することは、聞く側にとっても視覚的に分かりやすく、話す側にとっても自分の言葉で話しやすいため、1年生なりのアウトプットに繋げることができた。
- ・一人一仕事を楽しく調べられるように活動や発問では児童に親しまれそうなネーミング(家のお仕事探検隊・名人ポイント・家族ニコニコ大作戦等)を取り入れた。練り上げや振り返りでは、上記の①～⑥の項目に焦点化していくことで児童の思考が整理できた。
- ・ICT活用によって、気付きの質が高まってきた部分もあるが、タブレット操作に時間がかかり、自分の考えをまとめたり、分かりやすい伝え方を考えたりする時間が疎かになる児童もいたため進行状況によってはアナログ面に切り替える準備も必要であった。
- ・楽しいだけに終わらず、「楽しい中に気付きあり」の学習となるように、児童自身がさらに目的意識を自覚し、自分の力で解決したくなるような課題・発問の工夫が必要である。

自他の気づきを共有し、考えを深め合う生活科学習の在り方
 ～見つけた事象について気付いたことや思ったこと、感じたことを伝え合う活動を通して～

日立市立中小路小学校

1 はじめに

本校の教育目標は「確かな学力をもち 心豊かに たくましく生き抜く児童を育成する」と掲げ、「のびのびステップアッププラン」（学力向上に向け）、「にこにこハートフルプラン」（豊かな心と人間関係形成に向け）、「わくわくチャレンジプラン」（健康増進と安全な生活に向け）をもとに日々、教育活動に取り組んでいる。

今回は、1学年生活科の「たのしいあき いっぱい」の授業実践から事例紹介する。気候の変化から、植物や虫たちにどのような変化が見られるかについて考えながら比較し、新たに発見する活動を通し、自然の不思議や面白さに気づき、また自分たちで楽しめる遊びや遊び道具を児童たちが創って遊ぶことへ繋がる学習過程の前段階の学習活動である。

2 実践事例

(1) 単元「たのしいあき いっぱい」

(2) 本単元の目標

- ① 身近な自然の違いや特徴を見付けたり、自然の様子や四季の変化や不思議さに気付いたりすることができる。
- ② 秋の自然と関わる活動を通して、遊びや遊びに使うものを工夫してつくることができる。
- ③ 身近な自然を取り入れ、自分の生活を楽しくし、友達と遊びながら遊びを創り出そうとする。

(3) 単元の指導計画（21 時間扱い）

○：指導に関する評価 ◎：記録に残す評価

次	時	学習内容・活動	知	技	思	態	評価方法・留意点等
1	1 2 ③ 本 時	・校庭で初秋の樹木や虫等を観察する。 ・夏の様子と比べて変わったことを記録する。	○		◎		知①樹木や草花の葉の色や形、におい等、夏と秋の校庭の自然の様子について違いに気づき、記録カードに書いている【発表、シート】 思①幼児期や日常の経験を思い起こして、秋の自然の特徴を探している。【発表、観察】
2	4 5 6	・公園で秋を探す。 ・気付いたことを話し合い、カード等に記録する。	◎		○		知②色の変化した葉や、夏にはなかった自然物を探し、友達と見せ合う。【観察、発言】 思①過去の生活で秋の自然と関わった経験について話しながら秋の自然物を探している。【発言】
3	7 8 9	・秋の自然の中で簡単なおもちゃを作ってみて、遊ぶ。 ・遊びやおもちゃに使えるような秋の産物を選ん			○	○	思②自分のしたい遊びについて話しながら、集めた自然物を分類して、使う物を決めている。【観察】 態①何度も自然物を探しに行ったり、いろいろな種類の自然物を試したり友達と

		で、さらに収集する。				相談したりしながら秋の自然物を使って遊びやおもちゃを作っている。 【観察、作品】
4	10	・秋の様子や産物について活動したことを発表する。	○			知①季節によって楽しめる遊びや生活の様子が変わること気付いている。 【観察、発表】
5	11 12 13 14 15 16 17	・秋の産物を用いておもちゃ作りの計画を立てる。 ・作ったおもちゃで友達と遊び、もっと楽しく遊べるように作り方や遊びを考える	○	◎	◎	技①四季が織りなす変化の中に、秋は葉の変色や実りがあること等、自然には一定の決まりがあることに気付いている。 【ワークシート、発表】 思①木の実や材料をいろいろと組み合わせながら、試行錯誤を繰り返し遊ぶ道具を創ろうとしている。【行動観察、作品】
6	18 19 20 21	・自分の作ったおもちゃで園児や他学年の児童と一緒に遊ぶ準備をする。 ・一緒に遊ぶことを楽しむ。	○	◎	◎	知①季節の自然物で楽しく遊べることに気付いている。【あそんだよカード、作品】 技①みんなで遊ぶことの面白さや、遊ぶ際にはルールを守ることが大切なことに気付いている。 【行動観察】 態②自分で遊びを創る面白さを実感し、これからも遊びを創り出そうと意欲をもって 【行動、振り返りカード】



見付けた虫や生き物たちがどのような様子だったかを伝え合っている場面。身振り手振りをまじえ、身体で表現しながら友達に伝えている。

後日、秋の木の実で作った遊び道具で、上級生と遊んだ場面。上級生を迎えておもてなしする気持ちをもつ機会にもなった。



3 成果と課題

- (1) 児童は校庭で見付けた秋をタブレットで撮影し、教室のモニターに映し出したことで、全員で共有することができた。また、ラシヤ紙に描かれた校庭の図へ自分が秋を見付けた場所にシールを貼ることで視覚的にも表し、確認した。虫たちがどんな様子だったか身体で表現しながら伝え合う場面もあった。本学級には、言葉で発言することが難しい児童がいる。そのため少人数のグループで見付けた秋について話し合いをする場面を設定すると、生き生きと話し合いに参加できた。
- (2) 授業の中で主体的・対話的に学ぶ場面を設定することは大切であるが、今回、単元を通して学習を組み立てていく際に、グループの構成メンバーの大切さを感じた。座席ごとでグループを作りがちだったが、発言のしやすさや、話し合いが進展する等の授業者の意図を取り入れたグループの構成を考える必要を感じた。

1 はじめに

本校では、「ふるさと大久保を愛し、豊かに生きる児童の育成」を教育目標に掲げている。目標達成のための施策の一環として、「考えを伝え合い、学びを深めていく」学習活動を重視した授業づくりに取り組んでいる。生活科において、児童同士が伝え合う場、話し合う場を設定することで、互いに関わる意欲や気付きを高め、自分の考えを深めることができるのではないかと考え、実践を行った。

2 資料

(1) 単元名 うごく うごく わたしのおもちゃ

(2) 指導にあたって

本学級の児童は、生活科の学習を楽しみにしており、意欲的に取り組んでいる。学級全員がおもちゃを作ったことがあると答えているが、これは材料そのもので遊ぶおもちゃである。そこで、手作りの動くおもちゃに十分に触れさせ、おもちゃの動きや不思議さに気付く活動の後、思いのこもった動くおもちゃを作り、遊びを楽しむことができるようにする。導入で児童の好奇心や探究心を高めるために、教師が作った動くおもちゃで遊ぶ活動を行う。その際、仕組みと動力に目を向けさせ、動くおもちゃ作りへの意欲を高めさせたい。また、創作活動や遊びの中で友達と教え合ったり、考えを伝え合ったりしながら、「比べる」・「試す」・「工夫する」活動の充実を図り、気付きの質を高めていけるようにする。

(3) 本時の指導

① 目標

見本の動くおもちゃで遊ぶ活動を通して、遊びの面白さや動くひみつを考えながら自分の作りたいおもちゃを決めることができる。 (思考力・判断力・表現力)

② 準備・資料

・見本のおもちゃ ・タブレット ・計画書ワークシート

学習活動・内容	指導上の留意点 (評)評価
1 本時の学習課題を知る。 (1) おもちゃを見て、問いや思いをもつ。 (2) 問いや思いから、学習課題を決める。 うごくひみつを考えながら、作りたいおもちゃをきめよう。	・おもちゃを提示し、児童の興味・関心を高めていく。 ・問いを引き出すため、自由に発言できる雰囲気をつくる。 ・児童から出た問いから、課題を決め、本時で考える内容を明確にする。
2 動くおもちゃで遊ぶ。 (1) 友達と遊びながら、動きの秘密を考える。 (2) 動きの様子をタブレットで撮影する。	・友達と話し合うことができるように、グループで活動する場を設定する。 ・児童の興味・関心をさらに高められるように、動く秘密となる材料(輪ゴム・電池・うちわ等)を用意し、自由に手に取れるようにしておく。
3 本時の振り返りをする。 (1) ワークシートに記入する。 (2) 発表する。	(評) 遊びを通して、友達と話し合ったり、動く秘密を見付けたりしながら、作りたいおもちゃを決めることができているれば、本時の目標を

	達成できたと捉える。
--	------------

3 成果と課題

(1) 成果

見本のおもちゃと名前だけを発表し、遊び方を伝えずに自由に遊ばせたことで、友達同士で遊び方を考えることができた。名前から考えて「きっこう動くんじゃないか。」、道具から考えて「こうやって飛ばすんじゃないか。」等、たくさんの伝え合いの場が生まれた。遊びを体験した児童が、次に遊ぶ児童に教えたり、ヒントを出したりと伝え合い活動が活発に行われた。また、遊び方が分かったおもちゃでは、「競争すると楽しい。」「こういうルールにして遊ぶといいね。」等、教師が思いつかないような遊びが生まれていた。

「ゴムを伸ばすと遠くに飛ぶ。」や「うちわを強くあおぐと速く進む。」等、動きの仕組みに気付く児童も多く、第3学年の理科につながる内容となった。

(2) 課題

遊び方を伝えなかったことで、どう使ったらよいか分からず、遊び始めに時間がかかってしまう児童がいた。1時間の授業だけでは物足りない様子が見られた。時数を1時間増やし、1つ1つのおもちゃの遊ぶ時間をもっと長く取るようにすれば、友達と交流も多くなるのではないかと考えた。今回は、教科書で紹介されているおもちゃを8種類用意し、その8種類の中から選んで作製する形となった。しかし、他にも動くおもちゃはあるので、本やインターネットで自分で調べて作製する時間を取り、試行錯誤をしながら友達と活動できるようにしていけると良いと感じた。ただ楽しく遊んだだけになってしまう児童もいたため、遊びながら「なぜ動くのか。」と仕組みに目を向けて活動できるような場の設定をしていきたい。

【活動の様子】

遊び方や使い方・動く仕組み等、伝え合って活動している。

☆のぼるよ、のぼるよ



☆ヨットカー



☆とことこ車



☆ロケットボン



☆ぴょんコップ



☆ころころころん



「未来を拓く力を育む生活科の創造」
～自立し生活を豊かにしていくための資質・能力を伸ばすために～

日立市立成沢小学校

1 はじめに

学習指導要領によると、生活科における課題には、「学習活動が体験だけで終わっていることや、活動や体験を通して得られた気づきを質的に高める指導が十分に行われていないこと」、「表現の出来映えのみを目指す学習活動が行われる傾向があり、表現によって活動や体験を振り返り考えるといった、思考と表現の一体化という低学年の特質を生かした指導が行われていないこと」などが挙げられる。

また、県教育委員会の学校教育指導方針では、伸ばしたい資質・能力の重点事項に「自立し生活を豊かにしていくための資質・能力」が挙げられている。そこで、「自立し生活を豊かにしていくための資質・能力」を伸ばすために、次の3つの視点で授業改善に取り組むことにした。

- ①児童の学習意欲を高める課題の工夫
- ②考えを広げ、深める対話的な学びの充実
- ③学びを自覚し、次につなげる振り返る活動の充実



2 資料

(1) 児童の学習意欲を高める課題の工夫について

○ 第2学年「ぐんぐんそだてわたしの野さい」の指導を通して

生活科では、一人一人の児童の思いや願いの実現に向けた活動を展開していく。対象（人、社会、自然）との出会わせ方の工夫や子供の思いや願いを大切に学習課題を設定することが求められる。そのためには、体験活動と表現活動を相互作用させる単元構成の工夫が大切になると考えた。

そこでまず、単元の導入で野菜の実や種を用意し、触ったりにおいをかいだり、一部だけ見せたりしながら、何の野菜かを当てるクイズを行った。その結果、種からどうやって実ができるのか疑問がわき、調べたい育てたいという意欲につなげることができた。育てたい野菜について、調べてワークシートにまとめ、植え方や育て方に困ったら、ワークシートで確認するようにした。観察記録を書くときは、具体的な観点を示し、記録することで、気づきや比較につながるようにした。それにより、もっと大きく育てたいとか、おいしく育てたいとか、たくさん実をつけるにはどうしたらよいか、という次の体験活動の目標を一人一人がもつことができた。

(2) 考えを広げ深める対話的な学びの充実について

○ 第2学年「うごくうごくわたしのおもちゃ」・第1学年「なつがやってきた」の指導を通して

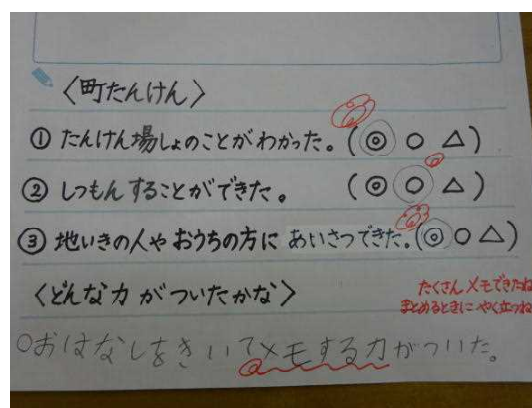
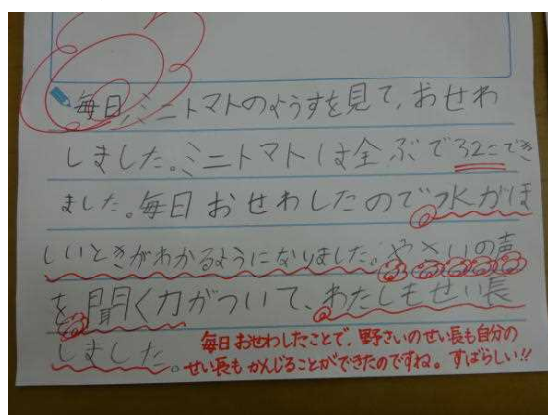
生活科では、それぞれの気づきを共有し関連付けて気づきの質の高まりを目指す。そのためには、「見付ける」、「比べる」、「たとえる」などの多様な学習の工夫が求められる。そこで、2年生のおもちゃづくりと1年生の水鉄砲遊びでは、気づきの質を高めるために「見付ける」、「比べる」、「たとえる」を意識した言葉かけをした。

(例)「〇〇さんのおもちゃが遠くに飛ぶのはなぜかな」
「〇〇さんと一緒に風車を回してごらん、比べるとどう違うかな」
「夏の雲は、春の雲と違って、何に似ているかな」

共感（そうそう）、納得（なるほど）、驚き（すごい）、問い返し（どうして）の視点で、意識して働きかけや言葉かけも行った。また、同じおもちゃを作った児童をグループにして、どのように工夫すると楽しくなるか、もっとよいおもちゃになるか「改良会議」を行った。友達との対話の中から、気づきが生まれ、実際に遊びながら改良する時間を作ることで、よりよいおもちゃに作り直すことができた。また、一人一台端末を活用して、調べることができているグループもあり、児童は個別最適な学びを選択し、考えを広め、深めている様子が見られた。

(3) 学びを自覚し、次につなげる振り返りの活動の充実について

児童は、学習したことを自分の言葉で語ったり、ワークシートに記録したりすることを通して、その価値を実感すると考える。そこで、活動の最後には、振り返りの時間をしっかり確保し、一人一人の気づきを全員で共有した。また、単元の最後には、単元全体を振り返る時間をつくった。振り返るときは観点を示し、学びの実感と共に、自分自身の成長も実感できるようにした。



3 成果と課題

(1) 成果

- ・学習課題を工夫し、体験活動と表現活動が充実することで、児童の気づきの質が高まり、学習の意欲が高まった。
- ・対話的な学びを充実させることで、活動や対象を見つめ直したり、過去のことや周りのことと比べたりして気づきの質が高まった。
- ・振り返る活動を充実させることで、新たな気づきが生まれ、次の活動への意欲につなげることができた。
- ・活動や体験を振り返る場面で、観点を示したことで、対象への無自覚だった気づきを自覚したり、気づきを関連付けたりすることに有効であった。
- ・生活科以外の時間でも生活科で学習したことを生かす場面が見られ、自立への基礎につなげることができた。

(2) 課題

- ・単元構成を工夫し、児童が主体的な活動を進めるとともに、学習を繰り返すことで、自分のよさや可能性に気づき、実際の行動につなげることが必要である。
- ・児童の多様性を生かし、学びをより豊かにするために、ICT機器や一人一台端末等の学習環境を充実させ、一人一人が個別最適な学びを選択できるようにすることが必要である。

確かな学力を育てる学習指導の在り方
—ICT を効果的に活用した授業改善を通して—

日立市立諏訪小学校

1 はじめに

本校の教育目標は、「自ら考え、判断し、正しいことを進んで行う心身ともに健やかな子どもの育成」である。その実現に向けて生活科では、具体的な活動や体験を通して一人一人が自ら考え、正しく判断して行動できるようにすることをねらいとし、学習を進めている。

ここでは2学年の生き物を飼育する単元の事例を紹介する。生き物を飼育する活動を通して、生き物への親しみをもち、生命を大切にできるようにすることを目指して実践を行った。

2 実践事例

(1) 単元 生きもの「にこにこ」大作せん

(2) 指導にあたって

捕まえた生き物が「にこにこ」になれるような接し方を児童に考えさせ、命を大切にできるようにしたい。第1・2次では飼育の準備と生き物の捕獲を行い、生き物に慣れ親しませる。生き物がすみやすい環境を整える第一歩として、生き物が元々すんでいた場所が生き物にとって最適（にこにこ）な環境であったことに気付かせたい。

第3次では、生き物の飼育方法を調べ、飼育を行っていく。図鑑やタブレット端末で調べることで正しい知識を得て、飼育環境を整えることが、生き物が「にこにこ」になることであり、命を大切にすることであると気付かせたい。また、毎日タブレット端末を使用して観察・記録をしていく。写真を撮りためることで小さな変化にも気付けるようにしたい。第4次では、同じ生き物を飼育してきたグループごとに生き物新聞を作り掲示することで、生き物の形態の多様さや生態の面白さに気付かせたい。

(3) 本時の指導

① 本時の目標

生き物を捕まえたときのことや場所などを思い出して、生き物のすみかを整えることができる。
(知識及び技能)

② 展開

学習内容・活動	指導上の留意点・評価規準【評価方法】 ○指導に生かす評価 ◎記録に残す評価
1 本時の学習内容を確認し、課題をつかむ。 生きものがいた場所を思い出し、生きものが「にこにこ」になれるすみかを作ろう。	・前時までに、同じ生き物を捕まえるグループを作っておき、そのグループで話合いや飼育をできるようにしておく。 ・活動の流れを確認することで、本時の活動内容を理解できるようにする。
2 生き物を捕まえたときのことや、いた場所の様子をグループで話し合い、グループごとに記録カードにまとめる。 (1) タブレット端末で撮影した写真を元に意見を出し合う。 (2) 「すみかカード」にすんでいた場所の様子を書き出す。	・各自がタブレットで撮影した写真を持ち寄り、捕まえた時の様子を思い出せるようにする。 ・「すみか」カードに捕った場所の様子を書き出すことで、何が必要で、どんなすみかにするかグループで共通理解できるようにする。

3 「すみかカード」を元に、生き物のすみかを整える。

(1) 教師や児童が用意したものを使ってすみかを整える。

【用意するもの】

- ・石 ・木の枝 ・色々な種類の草
- ・土 ・霧吹き ・枯れ葉 ・枯れ枝
- ・卵の殻

(2) どんなすみかにしたか発表する。

【ダンゴムシグループ】



ぼくたちはダンゴムシを飼います。ダンゴムシは青空広場の石の下にいました。そこに近づけるために、土、枯れ草、石を入れて、霧吹きをかけました。大事にそだてたいです。

【バッタグループ】

わたしたちはバッタを飼います。バッタはプールの横の草むらにいました。そこに近づけるために、土、草を入れて、霧吹きをかけました。たくさん草をたべてほしいです。



4 まとめをする。

生きものが「にこにこ」になるには、もともとすんでいた場しよに近づけるとよい。

5 振り返りと次時の確認をする。

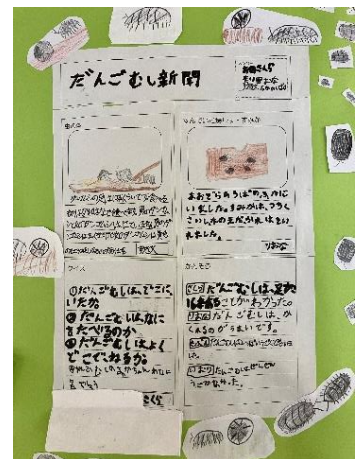
◎生き物を捕まえた場所の特徴について友だちと話しながら、すみかを作っている。

(知識・技能)【発言・行動】

○なかなか作業が進まないグループには、生き物を捕まえた場所の様子を思い出せるよう問いかけたりヒントを与えたりして、すみかを作れるようにする。

(知識・技能)【発言・行動】

- ・すみかカードに記入したことを基に発表するということを伝える。発表の仕方を確認し、グループごとにスムーズに発表が行えるようにする。
- ・発表を始める前に、練習をすることで、自信をもって発表できるようにする。
- ・発表を聞くときは、自分たちの作ったすみかと同じ所や違う所に気付けるような声掛けを行う。
- ・本時の学習を生かして、えさやりやすみかの手入れを、毎日行っていくよう伝える。
- ・振り返りシートで本時の学習を振り返る。
- ・次時の学習内容を伝える。



3 成果と課題

学習前は生き物を捕まえてもすぐに死なせてしまう児童もいたが、適切な飼育方法を調べて実践することで、生き物を大切に飼うことができるようになった。また、生き物の様子を毎日写真で記録したことで、新聞にまとめる活動をスムーズに行うことができた。虫が苦手だった児童も、すみかを作ったりえさをやったりすることで、愛着をもつことができた。

今回は新聞にまとめる活動を行ったが、児童が学習内容を発表する様子を動画に撮って保護者や地域に発信するなど ICT をさらに活用した方法も考えられるので、様々な方法を検討していく必要がある。

未来を拓く力を育む生活科の創造
～「もっとなかよしまちたんけん」の学習を通して～

日立市立塙山小学校

1 はじめに

小学校学習指導要領生活編の目標(3)では「身近な人々、社会及び自然に自ら働きかけ、意欲や自信をもって学んだり生活を豊かにしたりしようとする態度を養う。」と設定されている。この目標の背景として、児童が身近な人々、社会及び自然と直接関わり合う活動や体験を重視し、児童が自分の思いや願いを生かし、主体的に活動することができるようにするといった点が挙げられる。さらに資質、能力を育成するため、〔身近な人々、社会及び自然に関わる活動に関する内容〕の(4)(8)を指導する。

本校の学区には、交流センターや認定こども園、自動車学校などの公共施設だけでなく、花屋や総菜屋など地元の方が経営する店もある。また、ゲストティーチャーとして地域の方を招いたり、防災訓練を合同で実施したりと、地域交流が盛んである。

ここでは、第2学年の「もっとなかよしまちたんけん」の実践を紹介する。自分たちの住んでいる町に興味関心をよりもてるようにし、自ら調べたいことを調べ、自分たちの「町のたから」を発見し、町への親しみと愛着がふかめられるような学習活動を展開したいと考えた。

2 実践事例 (12時間扱い)

(1) 学習の流れ

学習活動・内容	児童への支援・準備
1 たんけんの計画を立てる。 地域に探検に出かけ、地域の場所や人の役割を見つけよう。 ・探検先ごとのグループ編成 ・グループごとの探検計画作成 ・探検のルールやマナーの確認 グループ → 学級で共有 ・質問事項の確認と役割分担	・1学期に実施した「どきどきわくわくまちたんけん」を振り返り、もう一度探検に行きたい場所を決める。 ・児童の希望を中心に、学区内のたんけん受け入れ可能な施設に依頼し、了解を得る。 ・探検付き添いが可能な保護者を募る。 ・児童の質問内容についてまとめ、事前に受け入れ施設に依頼書と共に配付する。 ・教科書巻末の「かつどうべんりちょう」を活用し、グループごとに確認をする。 ・グループで確認したことを発表し、学級全体で共有することで、ルールやマナーの徹底を図る。 ・質問が重ならないよう、質問事項をグループ内で分担するよう指示する。 ・あいさつや質問の仕方について練習の時間を十分に確保する。 ・探検後、帰校してからの活動についても、確認する。 ・付き添いの保護者と、それぞれの訪問先で活動する。 ・事前に決めた質問のほかにも、その場で気付いたことなどについて調べてくるよう伝える。 ・記録写真については、保護者に依頼する。 ・ワークシートにグループで分担して記録する事を伝える。 ・新聞形式で、グループごとに発表資料を作成するよう指示する。 ・「まず」「次に」などを使って、分かりやすく伝える説明の仕方で話すように指示する。 ・全体発表後掲示をし、ふせんを活用して感想や気持ちを交流する。 ・発表したことを振り返り、訪問先へお礼の手紙を書くよう指示する。 ・自分の町には、どんな良さがあるか確認し、次の単位につなげていく。
2 まちたんけんをする。 ①はなやま交流センター ②郵便局 ③長福寺 ④はなやま自動車学校 ⑤はなやま認定こども園 ⑥あじま花店 ⑦このみ総菜店 ⑧大谷畳店 (水害対応のため中止) ・グループごとに訪問する。 ・ワークシートに記入する。 ・記録写真を撮る。	
3 見つけたことを紹介する。 ・グループごとにまとめる。 ・グループごとに発表会をする。 ・お礼の手紙を書く。	
4 本単元の振り返りをする。	

(2) 資料 【町探検の様子】



《 塙山交流センター 》



《 あじま花店 》



《 長福寺 》

3 成果と課題

(1) 成果

児童は、毎日の登下校の中で見慣れている風景の中から、1学期の「まちたんけん」を通して「どんなところなのだろう。何をしているのだろう。」という疑問をもち、「もっとなかよしまちたんけん」に取り組むことができた。

何気なく通り過ぎていた花屋やお寺に、初めて訪問し話を聞いたり、卒園したこども園で改めて仕事についての話を聞いたり、今まで知っていたつもりでいたはずの、地域の様子をより具体的に聞き詳しく知ることができた。また、交流センターや郵便局では、公共施設として地域住民のために仕事をしている具体的な活動について知ることができた。例年畳店に協力していただき、そこで初めて「畳」に触れる児童も少なくなかったが、今年度は、水害による畳の注文が殺到し訪問がかなわなかった。代替として交流センターの協力を得て金沢斎場前の「長福寺」への訪問ができた。お寺に行ったことのない児童がほとんどの中、興味深く見学や質問ができ有意義な活動となった。

この学習を通し、地域の中で見守られて生活できている実感を味わうことができた。

今後、河原子小学校と「まちたんけん発表会」を主としたオンラインによる交流学習を計画している。互いの学区の共通点やよいところ等に気づくことができればと考える。

(2) 課題

まちたんけんの活動を進めるうえで、児童訪問の受け入れ先を選択することが年々難しくなっている。今年度、コロナ感染症が5類に移行し訪問環境は従来通りに戻りつつあるが、高齢者等福祉施設に関しては制限がある。また、塙山地域の実態として、商店街が縮小しており、児童の「行ってみたい・聞いてみたい」と訪問できる場所にずれが生じてきている現状である。児童の希望と訪問先がうまく結びつくよう、地域の特色を生かしながら訪問先の発掘を進めていきたい。

児童の主体的な活動を充実させた授業づくり
～地域の「もの・場所・人」との関わりを通して～

日立市立油縄子小学校

1 はじめに

本校の学校教育目標は「自ら学び 心豊かに 心身共にたくましい 児童の育成」である。このテーマのもと、生活科の学習では、具体的な体験や児童の主体的な活動を重視し、生活上必要な習慣や技能を身につけることを主な目標としている。

子どもたちは1学期に町探検を行い、町の様子について様々な発見をしてきた。その際に子どもたちは、「どんなお店があるかも知りたい。」「お店の人に質問をしてみたい。」等という思いを膨らませていた。今回は、地域の方々や保護者の方の協力を得て、2度目となる町探検を実施し、子どもたちが地域の方々と交流する中で、新たな発見をしたり、自分自身の成長を感じたりすることができるようにしたいと考えた。

2 資料（実践事例、写真等）

（1） 単元名 わたしの町 はっけん

（2） 単元の目標

○ ルールやマナーを守り、安全に気を付けながら町を探検し、自分たちの生活は、様々なものと関わっていることが分かる。（知識、および技能の基礎）

○ 町探検を通して地域にかかわる、もの・場所・人について考えている。（思考力・判断力・表現力の基礎）

○ 地域の町の自然やもの・場所・人などの様子から、自分たちの生活とのかかわりに気付くとともに、自分の町のよさに気付き、それらを大切にする気持ちをもったり、地域に関わろうとしたりしている。（学びに向かう力、人間性等）

（3） 単元設定に当たって

1学期に行った生活科の町探検で、子どもたちは町の自然や、冬から春にかけて変化したことを発見してきた。2度目の町探検となる今回は、自然だけではなく「もの・場所・人」に視野を広げられるようにしたい。事前学習として「見たいこと」や「聞きたいこと」を考える時間を設けることで、町探検への意欲を高めていく。

本単元を通して、自分たちの住む町のよさを発見したり、自分たちの生活とのかかわりに気付いたりすることができるよう、子どもたちの主体的な活動を重視する。そのために、自分で考えたり、班で話し合ったりする活動を多く取り入れていく。また、校外で班行動をしたり、地域の人に質問したりする活動は子どもたちにとって初めてのことなので、安全に活動するための約束を決めたり、見学時の挨拶や話し方も考えられるようにしたい。

<写真>

(1) 町探検の様子



お店の人に積極的に話しかけたり，質問したりする様子が見られた。初めて知ることが多く，興味を持って話を聞いていた。

まとめの活動では，探検をするなかで発見したことを生き生きと紹介することができた。

(2) 見つけたよカードの活用



3 成果と課題

(1) 成果

町探検の計画の段階から自分の意見を書き出していたため，普段はあまり自分の意見を言えない児童も，自信をもって活動に参加することができていた。その他にも，町探検をする時の約束を決めたり，効果的なルートを考えたりするなど，班ごとの主体的な活動を充実させたことで，子どもたち同士が積極的に関わり合う姿が見られた。

(2) 課題

まとめや伝え合う時間を十分に確保できず，それぞれの児童の気づきを全体に共有することができなかった。また，地域の方々に対して，町の魅力を伝える場をつくることで，児童が地域へ働きかけることができる機会を創り出すことができると思われる。

探究的な見方・考え方を働かせる学習指導の在り方
～3年間を見通した活動の工夫を通して～

日立市立助川中学校

1 はじめに

3年間を見通した「自己の生き方を考える」各活動を工夫し、探究的な学習や教科横断的な学習をスパイラルで発展的に繰り返すことによって、よりよく課題を解決する方法や新たな価値・課題が見いだされ、探究的な見方・考え方を働かせ、自己の生き方を考える資質・能力の育成ができると考え、本テーマを設定した。

2 資料

(1) 1学年「再発見！わが街日立」～身近な地域を調べる活動を通して～

① 3年間の学習の見通しをもつためのオリエンテーション

3年間の学習を見通すために、総合的な学習の時間の第1回目の授業はオリエンテーションを行った。1学年では、「自己の生き方を考える」という最終的なゴールに向けて、自分が住んでいる身近な地域・日立市について課題を設定し、情報の収集、整理・分析、まとめ・表現を行っていくことを確認した。

② わが街・日立についての学習

自身の課題設定のために、日立市と聞いてイメージするワードを、ウェビングマップを用いて数多く挙げることで、わが街を多面的・多角的に見られるようにした。これを参考に、日立市について自分が興味のあることや調べてみたいことについて、情報通信ネットワーク、施設のパンフレット等を活用して調べたり、日立市観光協会の講演を聞いたりして情報を集め、グループで一つの冊子にまとめた。調べ、考えた内容をランキング形式にして載せたり、人生ゲームのマス形式を用いて順序立てて述べたりといった工夫が班ごとに見られた。その後、各クラスで発表会を行い、グルメ、建造物、自然、祭りなど、様々な観点から日立の魅力を発信し合うことができた。



③ 次年度へのつながりをもたせる取り組み

2学年での学習に向けて、職業適性検査を実施した。教研式進路適性診断システム「学年別 PAS カード」を使い、生徒の特徴や興味をもっていること、長所等を可視化することができた。これをもとに、2年生の職場体験学習の希望をとった。

(2) 2学年「生き方を見つめる」～地域社会での体験活動を通して～

① キャリア教育プログラムを活用した学習

前年度に実施した職業適性検査をもとに、職業についての学習を行った。パナソニックが企業市民活動の一環として提供しているキャリア教育プログラム「私の生き方発見プログラム」を活用し、企業での役割や働くために必要な能力について学んだ。自分が伸ばしたい能力や、どのような役割の人が企業を支えるのかを考えたりすることができ、新たな視点で職業に触れることができた。

② 職場体験学習

自分が体験する事業所について、インターネットや各種情報誌、書籍等で調べ学習

を行い、体験学習に臨んだ。職場体験学習のまとめは、同じ事業所で体験したグループごとに PowerPoint で編集、模造紙への手書き編集を選択し、発表会を行った。活動の実演やクイズなど、各班が工夫を凝らしてまとめることで、調べたり体験したりしたことの補充・深化ができた。各教科の既習事項や情報を活用し、思考する様子が見られた。



③ 出前授業によって日立市から他地区へ視点を広げる

2 学期には、茨城新聞社や東京ガスネットワークの方々による出前授業を行った。茨城新聞社の授業では、新聞の仕組みや役割、新聞社で働くことのやりがいについて学ぶことができた。東京ガスネットワークの授業では、理科の既習事項を活用し、安全に配慮しながら楽しく実験に参加した。サービスを提供する立場の目線で考えることができ、将来社会の一員としてどのように生活すべきか考えるきっかけとなった。

④ 立志式で自身の生き方の展望を図る

3 学期には、立志式を行った。生徒は、それまで学んだ職業学習や体験学習と自らの生き方を結びつけ、自己を理解し、将来の生き方を考えた。自身の生き方を表す言葉、人生の理想とする言葉を自分で考え出したり、四字熟語から探したり、歴史上の人物の言葉を参考にしたりしながら、短い言葉で表し、発表することができた。

(3) 3 学年「自分らしい生き方を」～出会いから学び、発信することを通して～

① SDGs の観点から、古都の魅力を探る

3 学年では、自分らしい生き方を探究する視点として、SDGs について学び、自分ができる実現性の高い方法を考えた。1 学期は、京都・奈良について、SDGs の観点から、修学旅行を通して学んだことをまとめた。歴史・地理・気候・芸術・文化・建築・食など、様々な観点から体験し、学び取った内容を各自で PowerPoint にまとめ、後輩への旅行企画書という形でまとめ学習を行った。この発表会により、2 年生も次年度の活動に見通しをもつことができた。

② 3 年間の総まとめ、日立市の未来について考える

2 学期以降は、3 年間、総合的な学習の時間で学んできたことの総まとめの時期である。未来の世代を考えた持続可能な日立のまちづくりについて、他地区や他国の取り組みも参考にしながら地理・歴史・公民・自然科学などの面から考えた。これらのことをレポートや提言としてまとめた。街作りや、安全と防災、雇用など、現在の日立市の対策や取り組みについて調べ、評価し、訪れたことのある京都や奈良、会津など他の自治体と比較・検討したり、考えられる反論への自分なりの答えを出したりすることで、社会の一員として地域に貢献しようとする態度を養った。

「日立の未来」～新しい日立を作ろう～

【序論】

今の日本では少子高齢化が進んでいる。少子高齢化により、働く世代が減少していく。私たち若者にとって、安全の未来が重要となる。経済的に豊かになるだけでなく、安全な未来を築いていきたい。

このままだと、日立の未来は悲観的になってしまう。以下の理由から、私は少子高齢化について考えようと思う。

【本論】

日立市は現在、以下の4つのテーマをもとにまちづくりをしている。

◆「雇用の確保・創出」

◆「新入居民・新入社員」

◆「子育て支援」

◆「安心安全なまちづくり」

◆「企業の本拠地を誘出した企業誘致を推進」

◆「女性にとって働きやすい環境を整備、中心市街地へのオフィス誘致を推進」

◆「子育て支援を推進、子育て支援施設を整備」

◆「子育て支援を推進、子育て支援施設を整備」

◆「子育て支援を推進、子育て支援施設を整備」

◆「子育て支援を推進、子育て支援施設を整備」

◆「子育て支援を推進、子育て支援施設を整備」

◆「子育て支援を推進、子育て支援施設を整備」

◆「子育て支援を推進、子育て支援施設を整備」

◆「子育て支援を推進、子育て支援施設を整備」

3 成果と課題

3 年生を対象に 1 月に行ったアンケートでは、全員が「3 年間の総合的な学習の時間に見通しをもって取り組めた」と回答した。また、「総合的な学習の時間で自分の将来について考えることができた」と回答した生徒は、96%であった。

今後は、3 年間を見通した探究的な学習を発展的に繰り返すことに、本校の独自性をもたせた内容を加えられるよう、学習内容を研究していきたい。

1 はじめに

本校では、教育目標を「夢や希望をもって未来を切り拓く生徒の育成～1人1人がOnly Oneの存在として輝く(小規模校のよさを活かして)」とし、「自ら考え、自ら感じ、自ら行う生徒、あらゆる他者を価値ある存在として尊重する生徒、将来を見据え本気で学ぶ生徒」を目指す生徒像として、日々の教育活動に取り組んでいる。第1学年の総合的な学習の時間では、「社会や地域への理解を深め、これからの生き方について探究しよう」というテーマで、心ゆたかな体験学習から、新たな問いを見だし、自分の生活と環境への関わりについて探究する活動を行った。

2 資料(実践事例、写真等)

(1) 心ゆたかな体験学習

近隣にある、かみね動物公園へ見学学習に赴き、各自で事前に決定していた動物についての生態を観察した。見学後の総合的な学習の時間において、動物園での姿と野生での姿を各自がまとめ、発表することで情報を共有した。そこから、絶滅危惧種に指定されている動物が多いことに気付き、原因を探究する活動に繋がった。

(2) 絶滅危惧種に指定されている動物が多いことについての原因探究

インターネットや、書籍(学校司書と連携し、書籍を選定してもらう)を利用し、現在の地球環境について調べる。情報を基に、班で話し合い、動物の生態と人間の生活が密接に関係していることを知ることができた。

(3) SDG sについて知り、改善するためにどうすればよいか解決策を探究する。

SDG s すぐろく「ゴー・ゴールズ」、書籍、資料「私たちが目指す世界」、「SDG s ってなんだろう」を活用し、地球環境とSDG s の関わり、改善策の中から、どのように生活に取り入れることができるか、検討した。検討した内容を班ごとにスライドと模造紙にまとめる活動を行った。

(4) 発信する

文化祭にて、異学年や保護者、地域の人に向けて探究の成果を発信した。

発表後に振り返りを行い、探究活動や発表について再考した。



「ゴー・ゴールズ」で学ぶ様子



参考資料「私たちが目指す世界」

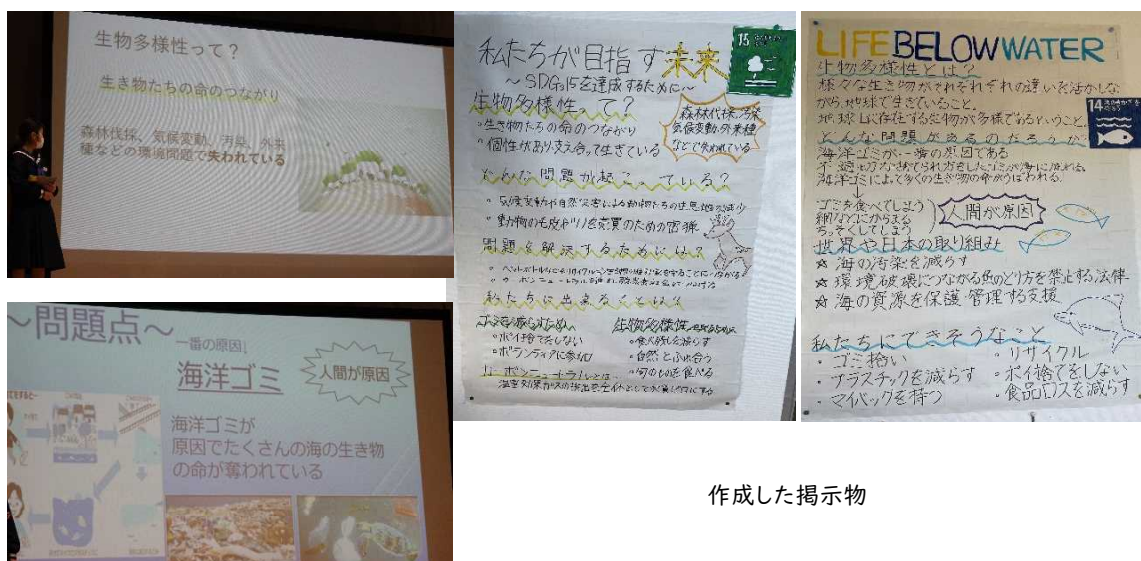
3 成果と課題

(成果)

- ・生徒達にとって行き慣れているかみね動物公園から、新たに課題を見つけることができた。
- ・自分の生活が自然環境に大きく関わっていることを実感している様子が見られた。
- ・自分たちも、動物たちも住みやすい環境にするためにどうすればよいか、これ以上絶滅危惧種が増加しないためにできること等、議論する様子が見られた。
- ・インターネットと書籍を利用することで、情報の比較・精選をすることができた。
- ・スライドと模造紙を製作することで、記載する情報の取捨選択を考えながら取り組むことができた。

(課題)

- ・ファシリテーターが不在の班では、対話や議論で難航する様子が見られたため、ファシリテーター育成の時間や取り組みの必要性があると考えた。
- ・出前講座等で、ゲストティーチャーを呼び、知見が深い方から学ぶ機会を作ると探究が円滑に進んだ可能性がある。
- ・インターネットでの情報を活用するために、情報モラルや情報リテラシーを学習することが必須となる。(時間の確保や教科との連携)



作成した掲示物

作成したスライド

1 はじめに

本校では、教育目標を「『たくましさ』と『しなやかさ』の育成」とし、めざす生徒像を「あすに向かって自ら学び考え実行する生徒」【やる気】、「かんせいを磨き思いやりのある心豊かな生徒」【根気】、「ねっしんに取り組むたくましく生きる健康な生徒」【元気】として、日々の教育活動に取り組んでいる。学習指導要領の目標と本校の教育目標から、総合的な学習の時間では、「探究的な学習に主体的・協働的に取り組むとともに、互いのよさを生かしながら、進んで地域社会に参画しようとする態度を養う。」「知の総合化を通して、自己理解を図り、自己の生き方・在り方を確立していく力を育てる。」を目標とし、全体のテーマである「人に学び、地域に学び、自己の生き方を考えよう」をもとに、各学年でさらに具体的な目標を掲げて活動している。キャリア教育の重要性からも「つながり」を意識した取組を心がけている。

2 資料

(1) 1 学年「ボランティア活動を通して、自分にできることを考える。」

① 地域の人から学ぼう集会



学区内にあるコミュニティセンターの方々に来ていただき、コミセンの役割や活動について話を聞く学習を行った。地域の人とつながるきっかけとなり、地域のボランティア活動にかかわろうという意識を高めることができていた。

② 地域のボランティア活動



ボランティア活動を通して、自分にできることを考える活動を行っている中で、「中小路クリーンアップ作戦」（地域のゴミ拾い）に参加した。そこで、生徒たちは海岸に多くのゴミがあることに気付いた。ボランティア活動について話し合う際、そのゴミをなんとかしたいという話題になり、自分たちにできることの話合いを行った。その中で、ゴミ箱の設置、看板の掲示、ポイ捨て防止のチラシを配るなど多数の意見が出る中、反対意見やメリット、デメリットについても話合いが行われた。なかなか意見がまとまらず、とりあえず海岸清掃を実施することになった。このように、生徒たちが考え、話し合い、行動するという活動を心がけている。

(2) 2 学年「職場体験活動を通して、自己の生き方について学ぶ。」

① 職場体験活動

ア 職場体験活動

地域の人や保護者に協力を呼びかけることで、地域とのつながりを深める。毎年同じ事業所に協力をお願いすることで、関係性を深め、よりよい体験活動ができる

ようにする。この2つを大きな目標に掲げている。今年度はコロナ禍を経て、再度関係性を築きながら、活動できる範囲で実施した。地域の事業所の方から働く意義や仕事の内容等を学ぶことで、社会生活に必要な知識やマナーを学んだり、自己の生き方について考えを深めたりすることができた。

イ 職場体験活動のまとめ発表



今年度は、発表形式を選択する形をとった。プレゼンテーションかポスターセッションのどちらが自分たちの発表としてよいか考え、選択していた。まとめる際、内容を考えたり、興味をもってもらうためにクイズを取り入れたり、実技を行ったり、それぞれが工夫して取り組むことができた。発表は一人で行った。発表していない時は、他の事業所の発表を見て感想を記入し、後日渡す。お世話になった事業所の方を招待する。これらを行うことで、学んだことを伝えようという意欲が高まったり、分かりやすい発表を心がけたりしていた。また、地域の事業所との関係性を深めるきっかけにもなった。

(3) 1・2学年共通の取組

・ 日立風流物体験学習会



日立郷土芸能保存会の皆様に講師をお願いし、1学年では「風流物の起こりや歴史などについて」「風流物の人形体験」、2学年では「風流物の人形体験（創作劇）」を行った。伝統芸能を身近に感じる貴重な機会となり、地域に貢献したいという意欲にもつながっていた。地域の方と体験を通してつながる機会にもなっているように感じた。

(4) 3学年「これまでの体験や学びを通して、自己の生き方を深める。」

・ 一人一研究

これまでの学びや体験の中から、推進したいテーマを設定し、一人一研究を行った。テーマが決まったら、計画を立て、現地調査や資料収集等をし、プレゼンテーションにまとめ、発表会をした。研究する中で新たな発見があったり、研究した成果を分かりやすく伝えようと工夫してまとめたりするなど、意欲的に取り組むことができた。今までの学習を振り返り、深めたいテーマを考え、関連づけることで、学びにはつながりがあることを実感できるようにし、さらには、調査し発表し合うことで、いろいろな考えに触れ、これからの自己の生き方を深められるようにした。

3 成果と課題

1学年では、地域の人とかかわったり、地域の活動に取り組んだりすることで、地域の現状を把握し、自分にできることを考えることができた。2学年では、職場体験を通して、地域の事業所の方々とつながることや、働く意義等について考えることで、自己の生き方について学ぶことができた。3学年では、これまで学んだことについて振り返り、さらに学びを深めることで自己の生き方について考えるきっかけとなった。

今後も、このような学年、地域、教科等とのつながりを大切に、意識して活動していきたい。また、地域とのつながりをさらに深めて、協力体制を作っていきたい。

1 はじめに

本校では『生きる力』を身に付けた生徒の育成」という教育目標のもと、総合的な学習の時間では、第1学年「地域を知ろう」、第2学年「地域に学ぼう」、第3学年「地域の未来を考えよう」をテーマに、地域の現状を理解したり、そこで暮らしたり働いたりする人が感じる問題、それらの人々がもつ地域や自分たちに対する願いを知るための体験活動を重ねることで、地域の人や社会と共に生きるための自分の在り方を考え、自ら社会に参画しようとする態度の育成を図ってきた。その学習のまとめにあたる第3学年では、1、2学年で学んだことをもとに、「自然」「産業」「生活」「文化」「観光」の視点から、地域が抱える問題や十分に活用されていない資源の活用方法についての理解や考えを深め、課題解決のための施策を立案する活動を行った。

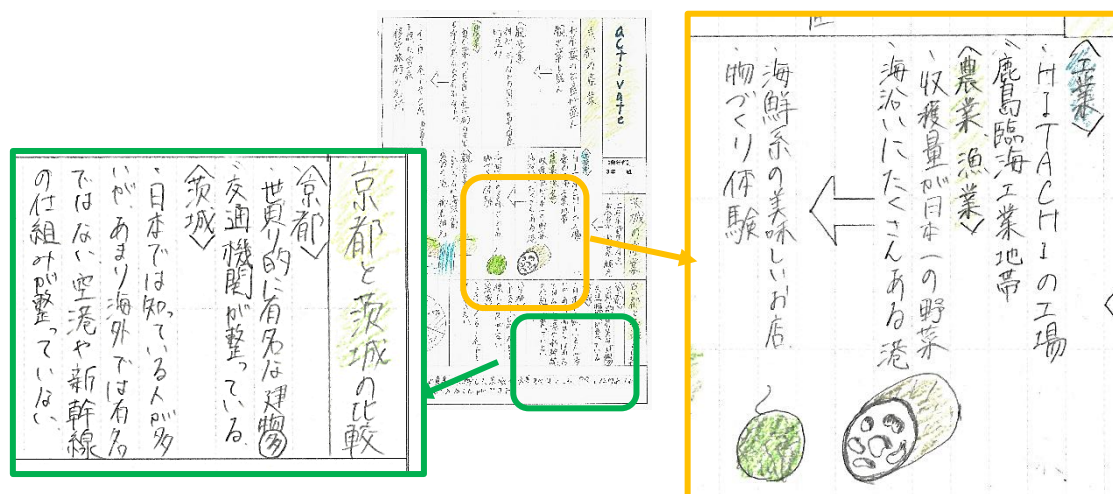
2 実践事例「第3学年『地域の未来を考えよう』」

(1) 修学旅行におけるフィールドワーク

修学旅行の目的地である奈良県と京都府は、日本有数の観光立県である。社会科や美術科など教科の学習で得た日本の文化や近畿地方についての知識、事前に調べ学習をすることで得た見学地についての情報をもとに、保有する文化財や多くの資源をどのように活用し、より魅力ある街づくりをしているのかを調査した。

(2) 地域の抱える問題について考える

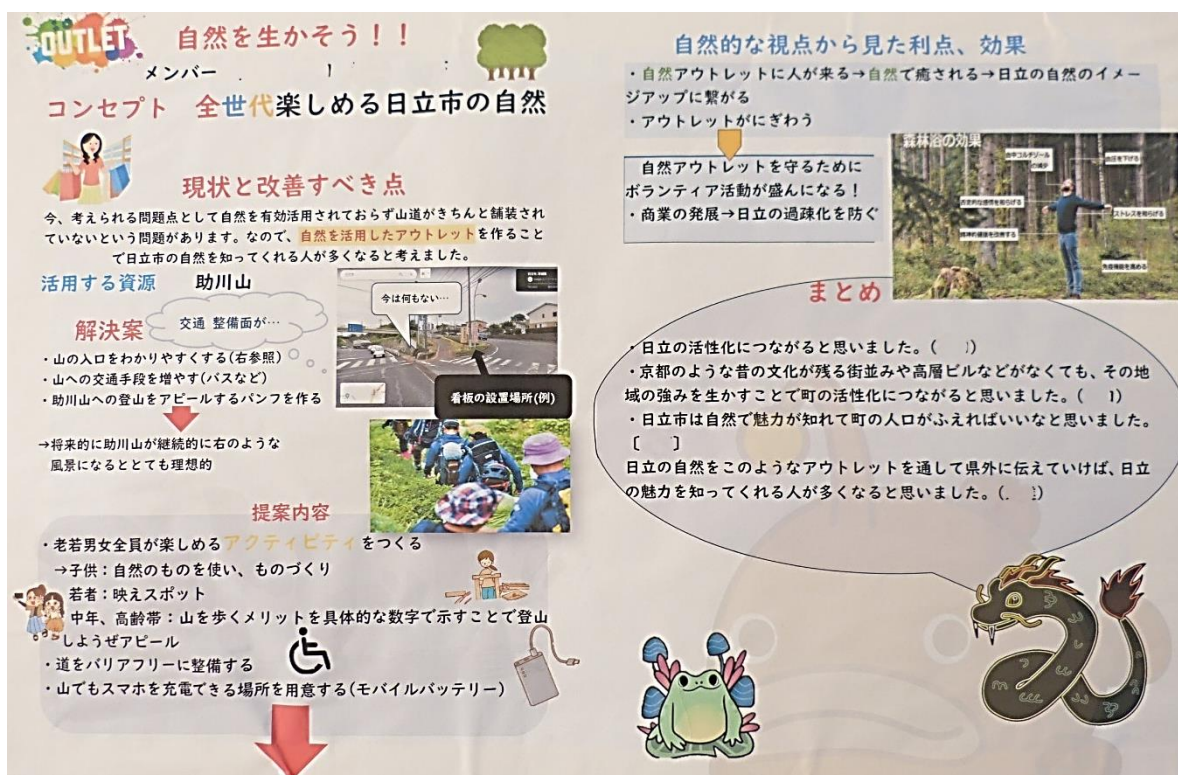
奈良県や京都府と自分たちが暮らす地域を「自然」「産業」「生活」「文化」「観光」の5つの視点から比較し、地域が抱える問題について考えた。その活動を通して、問題に気付くばかりでなく「比べてみたら、思っていた以上に良い地域と感じた」「日本一がたくさんある」など、地域の魅力を再発見することにもつながった。



資料1・生徒が作成したレポート

(3) 地域資源を生かした地域振興策の立案

学習を通して学んだことや考えたことをもとに、「自然」「産業」「生活」「文化」「観光」を柱とした地域活性のための施策を立案した。立案の際には①「地域の資源にどのような価値をもたせ誰に何を提供するか」②「そのことで地域のどんな問題が解消されるか」③「地域にどんな効果をもたらすか」を考え意見交換しながら案を深めていった。施策案は文化祭の会場で来場者に向けて発表を行うこととし、調べたり考えたりしたことを相手や目的、意図に応じて適切な方法を用いながら表現できるように指導した。写真を合成加工してイメージ図を作成し展示資料に掲載したり、動画を撮影、編集してPRのためのCMを作成をしたりと、今まで学習して得た技術を活用して活動する姿が見られた。



資料2・生徒が作成した展示資料

3 成果と課題

- (1) 生徒は、自分たちが住む地域の問題や可能性について探究し続けたことによって、地域の魅力を生かした地域づくりの必要性を理解することができた。また、生涯にわたりこの地域で生きていくためには何が必要なのかを自分事として考えることで地域の発展が自分たちの未来の生活に深く関わっていることに気づくことができた。
- (2) この取組では、社会科と美術科における学習を関連付けた。教科等横断的な学習の充実を図るためにも、教科等間の内容事項について、相互の関連付けや横断を図る手立てや体制を整える必要がある。

1 はじめに

中学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説によれば、「総合的な学習の時間」の目標として、「探究的な学習の過程において、課題の解決に必要な知識及び技能を身に付け課題に関わる概念を形成し、探究的な学習のよさを理解するようにする」「実社会や実生活の中から問いを見だし、自分で課題を立て、情報を集め、整理・分析して、まとめ・表現することができるようにする」「探究的な学習に主体的・協働的に取り組むとともに、互いのよさを生かしながら、積極的に社会に参画しようとする態度を養う」という3点を育成することを目指すとする。また、同資料内にある「学習の在り方」では、「探究的な見方・考え方」「横断的・総合的な学習」「よりよく課題を解決し、自己の生き方を考えていく」というキーワードが挙げられる。これらの目標や学習の在り方に照らしながら、本校で実践してきたことについて以下示していく。

2 資料

(1) 他教科との横断を意識した活動の工夫

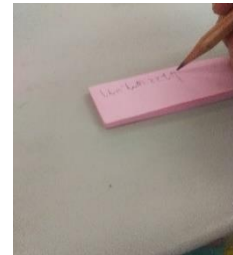
①国語科を意識して（2年 職場体験実践報告会）

相手の発表に対して、質疑応答の時間を設け、聞くだけではなく、話す（尋ねる）ことにも意識を向けられるようにした。探究的な学習に主体的・協働的に取り組めるように相手意識をもたせながら、お互いのよいところを認め合う活動に取り組ませた。



② 英語科を意識して（3年 修学旅行報告会）

相手の発表の様子とプレゼン資料に関する感想や反省点・よかった点などを「付箋」にグループで記載し、適切にフィードバックする。英語科では、プレゼンやスピーチで発表したものを振り返っている。フィードバックの機会を充実させることにより、英語科での振り返りにもつながると考え、付箋を用いた相互評価の時間を設定した。



地域との連携や教科の横断的な学習を活かした総合的な学習の時間
～わたしのまちの学校、わたしのまちが学校～

日上市立日立特別支援学校

1 はじめに

本校は多くの学校や公共施設、商業施設等に囲まれた場所に設置されている。その立地を活かし、中学部では「わたしのまちの学校 わたしのまちが学校」をテーマとして地域との交流の推進を図ってきた。この交流は、生徒自身の世界を広げるとともに、地域の特別支援教育に対する認識や理解を広げる機会ともなっている。また、事業所の協力による出前授業と職場体験を通し、生徒に対する職業観を広げ、働くことについて考えることもねらいとしている。これらの活動を通して、学校周辺の地域に興味関心を抱くきっかけに繋がっている。加えて、総合的な学習の時間を中心として生活単元学習、職業・家庭科、音楽科等と連携することで、横断的、体験的、継続的な活動ができ、自ら参加し、学び合う場面を増やしている。

2 実践事例

(1) ふれあいタイム（定期的な地域交流）

ふれあいタイムでは、学級毎に学校周辺の商業施設や事業所の中から3～4カ所の交流先を担当し、年間を通して交流している。4月は交流先宛てに作成した手紙を持って年度初めの挨拶に行き、一年間の交流をお願いした。7月は作業学習の時間に土班（花や野菜を育て手入れする作業班）が育てた夏のプランターを、一輪車やリヤカーに乗せて届けた。2月は冬のプランターを届ける計画である。届けた花を交流先の方々が大切に育ててくださっていること、生徒達に会えるのを心待ちにしている方々がいることを知ること、生徒達が役割意識をもって参加することができた。



(2) 生活単元学習との連携

① 達人に教わろう

交流している店舗、事業所に出前授業を依頼し、今年度は5つの事業所（とんかつとん、イナダスタヂオ、アンジーヘアワークス、内山味噌店、フローリスト舟木）の協力を得ることができた。始めに、グループ毎に達人（事業所の方）による実演を見たことで達人への憧れを抱くことができた。

次は直接技を教わりながら練習を繰り返した。そこで、実際に学んで自分の技にすることの難しさや楽しさを実感できた。全体を通して、意欲的に体験活動に取り組むことができた。



② 達人村へようこそ

文化祭（本校はいちょう祭）で保護者や全学部の子童生徒を対象にお店をひらき、達人に教わった技を披露した。グループの仲間と協力して受付やサービスにとりくみ、働くことの達成感を味わった。また、サービスを受けて喜ぶお客さんの表情を見て、役立てたことを実感していた。

③ 職場体験

今年度地域交流を進めている学校周辺の施設に依頼し、13カ所の事業所の協力を得て職場体験を行った。飲食店、菓子店、生花店、その他様々な職業の仕事場で実際に行われている作業を体験することで、仕事をする上で必要な姿勢を現場で知ることができ、緊張感を抱きながら、最後まで活動することができた。また、働くことのやりがいを味わい、将来について考える機会となった。

(3) その他の活動

① ALT 交流（7月・12月・1月）

ALT 交流では、簡単な英語での挨拶や活動などを通して異文化を理解し、積極的に人と関わろうとする態度を育てることができた。主にビンゴゲームや、カルタなど集団で参加できるゲームを通して学級・学年同士で自分から関わる場面が増えただけではなく、ALTに自己紹介をする場面を設定することで自分が伝えやすい方法で会話をすることの楽しさを実感している様子が見られた。



② なかよしタイム

スポーツ、パソコン、ミュージック＆ダンス、ゲーム、工作の計5グループに分かれて活動している。友達や上級生との関わりの中で、互いを認め合い、関わり合う楽しさを味わうことができている。余暇活動の過ごし方を知り、生徒自身の興味関心を深めることができる時間となるよう進めている。

③ 多賀中交流会（12月）

多賀中生が企画した射的や的当てゲーム、輪投げなどのミニゲームに本校生徒が参加した。お互いに緊張感が解け、笑顔で関わる場面が多く見られた。最後に、本校生徒によるダンス発表に相手校が参加し、和やかな雰囲気の中で交流することができた。

3 成果と課題

総合的な学習の時間を軸に、地域リソースを活用して各教科との横断的な学習活動を展開し、体験活動を計画的・継続的に取り入れたことで、生徒達は主体的に活動に取り組み、学校周辺に興味をもち、将来に向けて期待を抱くことができた。今後も、学校周辺の地域において、自分が役に立てることやできることを考える機会を設け、就労に向けた姿勢と意識の基盤を作ることが大切である。地域や人との関わりを通し将来に向けて希望を抱き、生徒自身が長所を大切にしながら、自分から参加したいと思える授業作りを今後も進めたい。